

ISSN

0913-1701

弘前学院大学英语米文学

第 42 号

弘前学院大学英语米文学会

2018.3

弘前学院大学英米文学

第 42 号

目 次

「イエール報告」と近代諸科学 —イエール・カレッジにおける古典語 必修課程とサイエンティフィック・スクールの関係に着目して—.....1	
原 圭寛	
Japanese and Foreigner's National Character and Cultural Differences as Seen from the Differences of Gesture (Abridged).....18	
奈良 章史	
2016-17 弘前学院大学英語弁論大会の金賞受賞者28	
バリオス キャラ	
2017 年度卒業論文概要一覧.....30	
弘前学院大学英語英米文学会活動記録.....54	
弘前学院大学英語英米文学会会員活動記録.....55	
弘前学院大学英語英米文学会会則.....57	
弘前学院大学英語英米文学会留学生奨学金規定.....59	

「イエール報告」と近代諸科学

——イエール・カレッジにおける古典語必修課程とサイエンティフィック・スクールの関係に着目して——

原 圭寛

はじめに

本稿は、アメリカ・コネティカットにあるイエール・カレッジの付属部門として1847年に設置された哲学・技芸部門(Department of Philosophy and Arts: DPA)及び、同部門のもとに設置されたサイエンティフィック・スクールの課程と、イエール・カレッジ学士課程との関係、及び1828年に出版された「イエール報告」と呼ばれるカレッジ・カリキュラムに関する報告書との関係を問い直すことで、同時代のイエール・カレッジがアメリカにおける近代諸科学の受容に対して果たした役割について検討することを目的とする。

イエールのサイエンティフィック・スクールは、その設立当初から度々名称を変更してきた。その変遷については、表1を参照のこと。

表1 サイエンティフィック・スクール関連略年表

1846	・農化学(agricultural chemistry), 野菜・動物生理学(vegetable and animal physiology), 実用化学(applied chemistry)の3教授職の設置を決定 ・デイがカレッジ学長を退任 ・ウールジーがカレッジ学長に就任
1847	・DPAの設置

- ・ 同部門の下部組織として応用化学スクール(School of Applied Chemistry)の開校
- 1852
- ・ 工学スクール(School of Engineering)の開校
 - ・ 応用化学スクール修了生に Ph.B.を授与することを決定
- 1854
- ・ 応用化学スクールと工学スクールを統合し、イェール・サイエンティフィック・スクール(Yale Scientific School: YSS)に改組、化学コースと工学コースの2コース制
- 1859
- ・ 工学コース修了生に C.E.を授与することを決定
- 1860
- ・ 一般コース(General)の設置、修了生に Ph.D.を授与することを決定
- 1861
- ・ シェフィールド・サイエンティフィック・スクール(Sheffield Scientific School: SSS)に改称
 - ・ 北米初の Ph.D.学位授与
-

アメリカにおいては、19 世前半ごろから社会の工業化をはじめとした様々な要因から、それまでのカレッジにおける古典語中心の共通必修課程に対する批判が出現し始めた。そのため古典語を廃止ないしは選択科目化し、代わりに近代諸科学を導入すべきという議論が行われ始める。その端緒として挙げられるのが、1825 年のハーバードの学則改正と、1828 年にイェールが出版した『イェール・カレッジの教授課程に関する報告書』(Committee of the Corporation and the Academical Faculty, *Reports on the Course of Instruction in Yale College*: 以下 *Reports* と表記)、通称「イェール報告」である(宮澤; 原, 「イェール報告(1828)の解釈とイェールの戦略」; 原, 「イェール報告の構造」)。ルドルフによれば、前者はカレッジの教授課程において古典語の一部を近

代諸科学に替えたのに対し、後者は古典語を中心とした必修課程の保守を目的としたと評している。そして19世紀中葉以降においては、ハーバードをドイツ型の近代大学を模し近代諸科学を積極的に受容した先進的高等教育機関、イエールをイギリス型の伝統的カレッジを堅持し近代諸科学の受容に反して古典語必修課程を続けた保守的高等教育機関と類型化し、前者に属する機関としてコーネルやジョンズ・ホプキンスなどの大学、後者に属する機関としてイエール・カレッジや19世紀中葉以降大量に設立された小規模カレッジを挙げている。こうした枠組みの中で、本稿で取り上げるイエールのサイエンティフィック・スクールは、伝統的カレッジの形態を堅持するための妥協案であり、イエール報告からの方向転換であると評されてきた(Rudolph 73-75, 122)。

こうしたアメリカでの研究の動向に対して、近年はこのような枠組みに疑問を投げかけるような研究成果が出されている。例えばモリル法の制定に大きな影響を与えたとされるターナー(Jonathan B. Turner, 1805-1899)の産業大学構想とイエール報告を比較した立川は、ランド・グラント・カレッジの考え方は先に示した枠組みのいずれにもあたらなかつたうで、イエール報告の議論の延長線上に位置づけて解釈が可能であるとした(立川)。

そこで本稿は、以下の諸点を検討する。まずイエールのサイエンティフィック・スクールの設立の経緯を確認する。続いてDPA及びサイエンティフィック・スクールが18世紀後半から整備が進められてきた医学・神学・法学の各部門と同様の扱いをされており、これらは当初はカレッジ卒業生を対象として設置された部門であったことを確認する。そしてこうした課程の階層関係に着目したうでイエール報告を取り上げ、このサイエンティフィック・スクールは同報告からの方向転換ではなく、イエール報告においてその登場を予期されていたとい

う点を確認し、またイエール報告においては近代諸科学の受容ないしはドイツ型大学の移入に否定的ではなかったという点を指摘する。最後にこれらの点を踏まえ、イエールがその後のアメリカにおけるドイツ型の研究大学の受容や近代諸科学の発展に対して果たした役割についての考察と、今後の研究の展望を述べる。

1 イエール哲学・技芸部門とサイエンティフィック・スクールの設立

サイエンティフィック・スクール設立の直接の端緒は、1846年のイエール理事会年次会議における、農化学(agricultural chemistry)、野菜・動物生理学(vegetable and animal physiology)、実用化学(practical chemistry)の3教授職の新設決議に見ることができる。これらの3教授職は、「当カレッジにて、卒業生および学士課程のクラス以外の者に講義を与えるという目的のために」設置された。またこれと同時に、イエールのこれらの教授職を設置すると同時に、当時の学長であったデイ(Jeremiah Day, 1773-1867)、化学教授のシリマン(Benjamin Silliman, 1779-1864)、そして後の学長であるウールジー(Theodore D. Woolsey, 1801-1889)をはじめとした6名の教授で委員会を組織し、カレッジの正規生以外に向けた教授課程についての諮問を出した (Minutes of the Annual Meeting ...1846)。そして翌年のイエール理事会年次会議において、「学士課程の学生以外の、また神学、医学、法学の各部門に所属していない学生の教授のための、哲学・技芸部門[Department of Philosophy and Arts]という名称の第4の部門を設置すること」が提案され、可決された(Minutes of the Annual Meeting ...1847; Chittenden, chaps.1-2)。

1847-48年のイエールの年次カタログ¹⁾には、このDPA付属のスクールとして、応用化学スクール (School of Applied Chemistry) が設置された旨が記されている。しかし設立当初は、修了者の学位授与につ

いては規定がなかった。この規定が最初に定まるのは1852年であり、応用化学スクールの修了生にPh.B.の学位が授与されることとなった。またこの年に同部門に工学スクール(School of Engineering)が設立される(*Catalogue...1846-7*; Chittenden)。

そして1854年にはDPAの2つのスクールを統合し、イェール・サイエンティフィック・スクール(Yale Scientific School)へと改組し、化学と工学の2コース体制となった。また1859年には工学コース卒業生にC.E.学位の授与が行われるようになる。更に1860年には新たにPh.D.学位授与の規定が制定され、サイエンティフィック・スクールに一般コース(General Course)が設置された。翌年にはサイエンティフィック・スクールに多額の寄付を行ったJ.E.シェフィールド(Joseph E. Sheffield)にちなんで、シェフィールド・サイエンティフィック・スクール(Sheffield Scientific School: 以下SSSと表記)に改称し、また北米初のPh.D.学位の授与を行った(Kelley 183-89)。

先にも述べたように、このイェールのサイエンティフィック・スクールはこれまで、イェール報告において提示されたカレッジの責務からの一種の方針転換として、近代諸科学をはじめとする諸科目を取り入れると同時に、これらの科目をカレッジ外の機関に集中させることで、古典語中心の従来のカレッジ・カリキュラムを保守したといった見方がされてきた。例えば、アメリカの高等教育カリキュラム史をまとめたルドルフは、同スクールについて以下のように評している(Rudolph 112)。

彼[=デイ]はイェールの役割を、古典語中心のカリキュラムによって人々を全ての職業に準備させ、「高度な知的文化...広範でリベラルな視点...強固で洗練された学識」を備えさせることと主張した。この時期[=19世紀中葉]のイェールは二分され、シェフィールド・サイエンティフィック・スクールにおいては、若者に資産家へのなりかたを教えるのをいとわず、

それはカレッジから不純物を取り除き、道徳的意図は B.A.プログラムの役割となり、Ph.B.プログラムは無教養人[barbarians]を生産するスクールと規定された。[中略]シェフィールド・サイエンティフィック・スクールへの学生たちの隔離から読み取れるメッセージは、名状しがたくも取り違えようがない：我々はギリシャ人であり、お前らは無教養人だ。

このようなサイエンティフィック・スクールの見方は、非常に限定的であると言わざるを得ない。その根拠として、サイエンティフィック・スクールには毎年、一定数のカレッジ卒業生が入学していることが挙げられる(表 2)。この事実を鑑みると、サイエンティフィック・スクールがカレッジから「隔離」され、ギリシャ人か無教養人かといった対立が確立していたとは言えないだろう。では、このサイエンティフィック・スクールは、カレッジとどのような関係を構築することを意図して設立されたのであろうか。

表 2 サイエンティフィック・スクール入学者の B.A./M.A.取得者数

Year	CHEMISTRY	ENGINEERING	GENERAL
1847-52	32/99 (10)		
1852-57*1	14/84 (8)	10/145 (2)	28/28
1857-61	12/55 (3)	5/62	23/24

Catalogue of Officers and Students in Yale College の 1847-48 年度版から 1860-61 年度版までを参考に筆者が作成した。数値は同年度内のカタログ掲載者の B.A.及び M.A.取得者延べ数/在籍者総数。表中のカッコ内は B.A./M.A.取得者中、他カレッジでの取得者数を示す。ただし*1 の期間についてはカタログに出身カレッジが記載されていない年度がある。コース名の変遷については表 1 を参照。ただし GENERAL の欄に記載されている数値は 1859 年以前のコース名未記載者の数を記載している。

1947年の時点で同部門への入学の条件は、「全ての本科カレッジ及び他カレッジの卒業生と、

その他の公平なモデルを有する若者」と規定されており、同部門の入学者がカレッジ卒業生に限られていなかったことが分かる。従ってこの文面からでは、同部門の対象学生はカレッジ卒業生を主な対象とするのか、カレッジと並置してカレッジ入学か新設部門への

入学かを選択させる形を主とするのか、判然としない。しかしここで注目したいのが、同会議では新設部門を「第4の部門」として、既存の神学・医学・法学の各部門と並置させて論じているという点である(図1)。

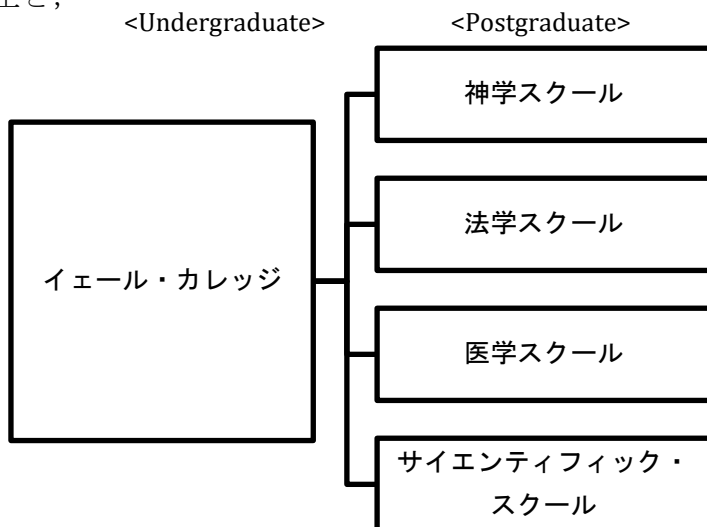


図1 1850年代のイエール・カレッジにおける

課程の階層関係

2 イェールの大学構想と「第4の部門」

これはこれまでアメリカ高等教育史においてあまり注目されてこなかった点ではあるが、イェールは1777年の段階で、ヨーロッパ大陸において確立していた中世以来の神学・法学・医学の各部門から成る「大学」を、イェールに移入しようとする計画があった。この計画はカレッジを中世ヨーロッパ型の大学の下級学部に見立て、その上位組織として、カレッジ卒業生向けに法学や医学の教授課程を組織しよう

とするものであった。この計画はすぐには実現しないものの、カレッジ教授課程への法学の導入や自然科学の拡充などの準備が徐々に行われ、18世紀末より徐々に医学・法学・神学の各専門職養成部門を整備していった(原、「カレッジの教授課程と専門職養成の関係」)。すなわち、DPAと並置させて論じられている既存の3部門は、カレッジ卒業生をその課程の対象とした、学校体系上カレッジの上位に位置する部門として当初は計画されていたのである。

そしてこれらの各部門と並置されて論じられているDPAも、カレッジ卒業生をその主な対象として設置されたと見るべきであろう。実際に1847年の理事会年次会議におけるDPA設置にあたっての委員会報告では、新部門設置が妥当とする理由の1つ目として、「我々の卒業生及び他の者より、カレッジの課程での一定のラインを超えた講義に対する要望が出されている」という点が挙げられている(Minutes of Annual Meeting...1849)。すなわち同部門の主眼は滞在卒業生(Residential Graduate)をはじめとするイェール・カレッジの卒業生及び他のカレッジ卒業生向けに、カレッジの課程よりも進んだ内容の講義を提供することにあつたのである。

またこの点は、同部門が授与していた学位の性質からも説明がつく。同部門が最初に制定した学位はPh.B.であり、これは確かに「学士」の学位ではあるものの、必ずしもB.A.学位と同じレベルの学位として与えられていた、というわけではない。表3に示すように、イェールがこれまで参照してきた中世以来の欧州大学では、下級学部でB.A.及びM.A.の学位を与えられると上級学部に進学でき、上級学部では下級学位としてそれぞれの専門に応じた専門職学士(LL.B.やM.B.

などが、上級学位として専門職博士(LL.D.やM.D.など)が与えられるという学位制度を有していた(別府)。また1847-48年度の年次カタログによれば、実際にイェールにおける先例として法学部門では1847年

の時点で、ほとんどの学生がカレッジ卒業後に入学していたが、授与している学位は LL.B. であった(*Catalogue...1847-8*)。従って、授与される学位が Ph.B. だからといって、直ちに B.A. コースと同レベルの教授課程であるとは言えないのである²。

表 3 中世ヨーロッパの大学の学位制度

上級	上級学位(教授資格) :	D.D., LL.D., M.D. など
学部	下級学位(教授補助資格) :	D.B., LL.B., M.B. など
下級	上級学位(教授資格) :	M.A.
学部	下級学位(教授補助資格) :	B.A.

3 イェール報告と近代諸科学

では、このサイエンティフィック・スクールの設立は、先行研究で述べられているように、イェール報告からの方向転換だったのだろうか。

イェール報告は周知の通り、当時の産業構造の変化に伴って現れてきた職業教育の要請、及び古典語不要論に対して、従来のカレッジ教育の重要性を説き、イェール・カレッジにおいては古典語を中心とした必修課程を継続することを宣言した文書であった。ここではカレッジの目的を、「優れた教育の基礎を築く」(to LAY a FOUNDATION of a SUPERIOR EDUCATION)とした。そのうえでカレッジ教育の効果を「精神の陶冶と装備」(discipline and furniture of the mind)に分類し、後者より前者をより重視するとした。しかしここでは必ずしも「精神の陶冶」、すなわち精神の諸力の拡張のみをカレッジ教育の効果として定めたわけではない。むしろ同報告は、カレッジ卒業後に学ぶ神学・法学・医学をはじめとする様々な職業教育における、古典語や諸科学の知識をバランス良く獲得すること、すなわち「精神の装備」の有用性をも説いており、その論理構造上前者は後者を包含すると考えられる(原、「イェール報告(1828)の解釈とイェールの戦略」)。

例えば同報告の第一部では、「カレッジの学生向けの教育課程は、専門職向けの学習を含み込むようにはデザインされていない。その目的は、いかなる専門職にも固有の内容を教えることではなく、専門職すべてに共通な基礎を置くことなのである」と、カレッジの役割を規定している。ここでは確かに職業に直結するような実用的な教育をカレッジからは排除しているが、こうした教育自体を否定しているのではなく、職業教育とカレッジでの教育を区別したうえで、前者に対する后者の重要性を説くという形を取っている(*Reports* 14-16)。

更に同報告では、「もしも適切な調整がなされたならば、商業、工業、および農業教育の詳細は、カレッジでは、滞在卒業生[*residential graduates*]に向けて行われてよい。そうなれば、実践的な技能は科学的な知識に基礎づけられるだろう」とも述べている。またイェール・カレッジにおいてはクラップ(Thomas Clap, 1745-1799)学長時代の数学及び自然哲学分野の進展に始まり、随時最新の科学をカリキュラムに取り入れてきたことも同報告第二部において主張している(*Reports* 45)。従って既にこの時点で、先に述べたような農化学や野菜・動物生理学などの教授職の設置が見据えられていたことがわかる。

更に同報告では、ヨーロッパ大陸、特にドイツにおける大学の模倣について、以下のように述べている。

しかしそうした諸大学が、アメリカの諸カレッジが細部に渡り模倣すべき手本であるのかについては、われわれは疑わしいと思う。[中略]ドイツの場合では、ギムナジウムと大学とでそれぞれ過ごす期間として二分割されているだけの教育期間は、合衆国ではグラマー・スクール、カレッジ、専門職向けの学に分割されている。ドイツの大学に入学する学生は、科学ではともかく、文芸に関しては、カレッジ卒業時点での合衆国の学生に近いが、ないしは同等のレベルにまで進んでいる。合衆国の諸カレッジに最も近似するドイツの機関はギムナジウムなのである。

(Reports 21)

このように同報告では、カレッジをドイツ型の研究大学へと転換させることには反対している。しかしながら、カレッジをギムナジウムと見做し、その上位課程として大学を設置することに関しては、その限りではない。先の引用は、以下のように続く。

もしも、イエール・カレッジに附属する神学、医学、法学の各スクールに、ドイツでは哲学スクールと称される文芸と科学の高度な研究用のスクールが付加されることとなれば、四つの部門を合わせてヨーロッパの意味における大学を構成するであろう。そうした場合でもなお、固有なカレッジ部門は明確で特有な目的を持つ。すなわち、他の四つのスクール全てへの準備となる諸分野を教えることである。*(Reports 21-22)*

ここまでの議論をまとめると、イエール報告は、職業専門教育やヨーロッパ的な意味での大学教育が、カレッジの教授課程の代替となることは否定したが、カレッジにこれらの教育への準備教育という固有の役割を見出したうえで、学校段階上その上位に大学や職業専門教育を位置づけ実施するという点についてはむしろ肯定的であったとも言える。

そして 1847 年設置のイエールの DPA 及び後のサイエンティフィック・スクールも、このイエール報告の考え方を踏襲したものと言えよう。初期の DPA 及び応用化学スクールや工学スクールは、先に示した「工業、および農業の詳細」をカレッジ卒業生向けに教えるという性格のものであった。そして 1860 年の Ph.D. 学位の制定とジェネラル・コースの設定に至っては、明らかにドイツ型大学の哲学部的なものを意図しており、1860-61 年度の年次カタログによれば、同コースの入学者のほとんどは B.A. 取得者であった(*Catalogue...1860-61*)。このように、サイエンティフィック・スクールをカレッジ卒業生向けのスクールと

見た場合、これはイエール報告の考え方を継承したものであったと言えるのである。

4 カレッジの大学化か、カレッジの上位組織としての大学か

このようにイエール報告は、近代諸科学の移入自体には抵抗していなかった。従ってイエール報告を、近代諸科学の移入に抵抗し、古典語を中心とした共通必修のカレッジ・カリキュラムを固持することを目指していたと解釈することは誤りである。先に示した宮澤の研究にも見られるように、イエール報告はカレッジの上位に大学を想定しており、これは実はハーバードの1825年の学則改定でも同様であった(宮澤)。しかしハーバードの学長がエリオット(Charles W. Eliot, 1834-1926)に代わると、この学校段階の考え方が変化する。

エリオット学長時代のハーバードの歴史をまとめたホーキンスによれば、エリオットは1872年に卒業生部門(Graduate Department)をハーバードに設置し、1890年に研究大学院(Graduate School)を整備した。しかしエリオットはこの研究大学院に付加的な価値しか持たせておらず、大学の中心はあくまでカレッジであるとしていた。これは、アメリカのカレッジの学生の入学年齢はドイツの大学の入学年齢より若干低くはあるものの、大差はないとエリオットは考えていたため、カレッジにはドイツの大学と同様の、より進んだ性質を持たせるべきと判断した、とされている(Hawkins 54-58)。このためエリオット時代のハーバードは、自由選択制を導入し学生の早期の専門化を進めると同時にあらゆる近代諸科学を科目として提供し、古典語についても必修ではなく選択肢の一つという位置に留めた。すなわちエリオットの時代になると、ハーバードはカレッジの上位に大学を設置するという考え方から、カレッジそのものを大学へと転換させるという考え方へと変化していった。

これに対してイエール側はカレッジをギムナジウムと同様の機関と定め、専門化以前の学生の基礎を築くためのものとして捉えていた。従って近代諸科学と古典語を一定の比率でもって必修とし、学生に選択の余地を与えないことで専門化の前提としての精神の諸力の拡張と博識さを強調した。これはイエール報告、及びそれ以前の医学・法学・神学の各部門の設置段階からシェフィールド・サイエンティフィック・スクールと Ph.D. コースの設置まで一貫した理念であった。そしてイエールは実際に、全米初の Ph.D. 学位の授与をハーバードやコーネル、ジョンズ・ホプキンスに先駆けて行っており、アメリカの近代研究大学の成立や近代諸科学の定着に際して無視できない貢献を果たしたのではなかろうか。

従って 19 世紀中葉のカレッジ・カリキュラムの論争は、近代諸科学の移入とドイツ型の大学制度の模倣を行うか、古典語中心の必修課程を堅持するイギリス型の伝統的カレッジのモデルでこれに抵抗するか、という図式では、イエールのサイエンティフィック・スクールの設立やこれとカレッジの関係、また Ph.D. 課程の整備などといった点は説明できない。むしろ双方共にドイツ型の学校体系に倣いつつ、前者がカレッジの大学化を目指したのに対し、後者はカレッジをギムナジウムに見立てたうえでその上位に大学を展開させようとした結果、必修制か選択制か、古典語か近代諸科学か、といった様々な論点が浮上した、と考えるのが妥当であろう。

おわりに

本稿は、1847 年のイエールの DPA の設立とサイエンティフィック・スクールの展開、及びこれとカレッジの関係に着目し、これが 1828 年のイエール報告からの方向転換なのか、同報告の考え方を継承したものなのか、という点を検討することで、19 世紀アメリカにおける近代諸科学の受容及び近代大学の移入に関する議論について新たな

枠組みを構築し、そのうえで 19 世紀中葉のアメリカ高等教育において近代諸科学の受容に対するイエールの果たした役割を検討することを目的とした。

これまでの研究では、19 世紀中葉のカレッジ・カリキュラムに関する議論は、ドイツ型の研究大学及び近代諸科学を受容するか、イギリス由来の古典語必修の伝統的カリキュラムを維持しこれに反発するか、といった枠組みで語られてきた。しかし本稿で示したように、イエールのサイエンティフィック・スクールとカレッジの関係、及びこれがイエール報告の議論を継承していたものであった点を考慮すると、従来の枠組みでは説明ができない。むしろ当時のカリキュラム論争は、ドイツ型の学校体系の移入を前提として、カレッジを大学化させるか、カレッジをギムナジウムに見立ててその上位に大学を展開させるか、という議論として枠組みを立てるのが妥当であろう。

本稿冒頭で示したように宮澤は、イエール報告での議論が「4年生のカレッジの教育を高等職業教育の前段階と位置づけたことによって、[中略]主要な専門教育と高等職業教育をすべてカレッジ卒業後の大学院レベルへと押し上げるための重要な思想的要因になったのではないか」としているが、本稿を通して 19 世紀中葉のアメリカ高等教育史の枠組みを立て直すことで、この仮説はより重要性を持つこととなろう。何故ならイエールは 19 世紀中葉に至ってもなおイエール報告を継承したカレッジ・大学教育を展開しており、これは近代諸科学の受容とドイツ型の研究大学の構築というその後のアメリカ高等教育史の流れと真っ向から対立するものでは無かったためである。特に 20 世紀以降のアメリカにおける科学研究が大学院レベルで隆盛したことを考えると、むしろイエールは、その後のアメリカの高等教育における近代諸科学の発展の基礎となったと見ることができる。

更に注目すべきは、近代的なアメリカ高等教育システムの成立に重大な影響を与えたコーネルの初代学長であるホワイト(Andrew D. White, 1832-1918)やジョンズ・ホプキンスの初代学長の D.C.ギルマン(Daniel C. Gilman, 1831-1908)が、それぞれイエールの卒業生であるという点である。ホワイトはイエールの B.A.を 1853年に、M.A.を歴史専攻で 1856年に取得している。更に名誉学位として LL.D.を 1887年に授与されている。またギルマンは B.A.を 1852年に取得しており、この両名はカレッジでの同級生でもあることから、この時期のイエールの教育やその背後に存在した思想が、その後の両者の大学の構築に重要な思想的契機を与えたものと考えられる。両者の大学教育に関する考え方がどのように構築され、これがイエールのカレッジ及び大学観とどのように関連してくるかについての思想史的検討が、今後の課題である。

註

- 1 当時のアメリカの各カレッジは、教員・理事・スタッフ・学生の名簿と、カリキュラムや入学要件、必要費用等を記したカタログを毎年刊行していた。特に学生の名簿は、在籍している課程ごとに記されており、既に取得している学位がある場合はその学位名称が付記されていた。DPA 所属の学生については、1852年の年次カタログからはどちらのスクールに所属しているかについても書かれているが、いずれのスクールにも属さない学生や、双方に属する学生も存在した。特にいずれのスクールにも属さない学生(表 2 の GENERAL 欄に人数を記載)は、ほぼ全員がイエールの B.A.取得者であった。
- 2 しかし表 2 に示したように ENGINEERING(C.E.学位)コースの場合などはカレッジの課程を経ずに入学するケースが多く、実情としては図 1 に示したようにサイエンティフィック・スクールが完全にカ

レッジの課程の上位に位置づいていたとは言えない部分もあるため、留意する必要がある。

文献一覧

別府昭郎. 「中世大学における教師と学位」. 『明治大学人文科学研究所紀要』, no. 41, 1997, pp. 297–313.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1847-8. New Haven. 1847.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1848-9. New Haven. 1848.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1849-50. New Haven. 1849.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1850-51. New Haven. 1850.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1851-52. New Haven. 1851.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1852-53. New Haven. 1852.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1853-54. New Haven. 1853.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1854-55. New Haven. 1854.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1855-56. New Haven. 1855.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1856-57. New Haven. 1856.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1857-58. New Haven. 1857.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1858-59. New Haven. 1858.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1859-60. New Haven. 1859.

Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1860-61. New Haven. 1860.

Chittenden, Russell H. *History of the Sheffield Scientific School of Yale University 1846-1922.* Volume I. Yale University Press, 1928.

Committee of the Corporation and the Academical Faculty, *Reports on the Course of Instruction in Yale College.* New Haven. 1828.

原圭寛. 「イエール報告(1828)の解釈とイエールの戦略:知識の教授を含み込むものとしての「精神の陶冶」」. 『近代教育フォーラム』, no. 23, 2014, pp. 283–95.

---. 「イエール報告の構造:中等教育としてのカレッジ教育課程と道徳的人間形成」. 『三田教育学研究』, no. 25, 2017, pp. 23–32.

---. 「カレッジの教授課程と専門職養成の関係:1777-1828年のイエールの事例を中心として」. 『人間と社会の探求:慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』, no. 78, 2014, pp. 17–29.

Hawkins, Hugh. *Between Harvard and America: The Educational Leadership of Charles W. Eliot*. Oxford University Press, 1972.

Kelley, Brookes M. *Yale: A History*. Yale University Press, 1974.

Minutes of the Annual Meeting of Yale Corporation, held on August 19, 1846 (Microfilmed: Reel no. 6). Yale University Corporation and Prudential Committee Minutes (RU 307), Manuscripts and Archives, Yale University.

Minutes of the Annual Meeting of Yale Corporation, held on August 19, 1847 (Microfilmed: Reel no. 6). Yale University Corporation and Prudential Committee Minutes (RU 307), Manuscripts and Archives, Yale University.

宮澤康人. 「ハーバード学則改正(1825)とイエールリポート(1828):アメリカにおける選択科目制度をめぐる論争の端緒」. 『東京大学教育学部紀要』, vol. 16, 1977, pp. 1–22.

Rudolph, Frederick. *Curriculum: A History of the American Undergraduate Course of Study since 1636*. Jossey-Bass, 1993.

立川明. 「イェイル・レポートからランド・グラント・カレッジへ:ジョナサン・ボールドウィン・ターナーと知の共和国構想の誕生」. 『国際基督教大学学報. I-A, 教育研究』, vol. 48, 2006, pp. 1–26.

Japanese and Foreigner's National Character and Cultural Differences as Seen from the Differences of Gesture

Abridged Graduation Thesis by Akifumi Nara, Senior

1. Introduction

Communication with other people is important for us when we live in modern society, and it is necessary for building a better relationship of confidence with people and knowing each other. Communication between persons is mainly established by exchanging spoken or written language. However, it is generally said that gestures and body language are another way of communication, and people often express their emotions without using language in their daily life. Especially, in international and cross-cultural exchanges, non-verbal communication such as gestures plays a large role as a supplementary means which overcomes differences in language.

Chapter 1 will describe that gesture which people usually use unconsciously is inseparably related to conversation, and the importance of non-verbal communication by explaining what type of non-verbal communications, such as body motion, consist of, and what kind of roles they take in face-to-face dialogue. Chapter 2 will discuss the differences of gesture between the Japanese, Americans, and British. The meanings of gestures may translate into different things in different countries even if these gestures are the same motion. Chapter 3 will consider gestures which have the same meaning and motion peculiar to each country by giving examples, and explore the reason why gestures differ according to country from the point of view of culture and religion comparing nationalities of Japanese, Americans and British people.

The reason why I wrote this paper was to improve my communication skills. I think it is possible to perform smoother communication by using not only spoken language but also body language. Non-verbal communication can make talking persuasive, and can change an impression which is given to others. I want readers to understand cultural aspects and religious background of gestures so they will not cause troubles and misunderstandings because of a

slight casual motion or behavior in intercultural communication.

2. Gesture as one of the Non-verbal Communications

In communication, the judgement whether people understand accurately transmitted information or not, does not depend on only spoken language, and people also receiving various clues about a degree of comprehension of conversation from other person's non-verbal language (Kobayashi, 684). For instance, if someone says "That is interesting" while looking in the wrong direction, we become anxious to wonder if that person actually has no interest for us. It is said that non-verbal communications have an effect to accompany spoken languages and supplement it, however there are lots of kinds of non-verbal communication, and those roles are rich in variety.

2.1 Definition of Non-verbal Communications

We transmit and receive a lot of information consciously or sometimes unconsciously without language. Koike describes about the definition of non-verbal communications as follows. Although it is generally said that the eyes are more eloquent than the mouth, not only the eyes but also various behavior speak as much as the mouth or more. Message transmission by the means besides a language is called non-verbal communications (126). There are a lot of measures, and way of relaying is not to be limited to only one, also distinctive feature of non-verbal languages are that a mode of expression changes depending on each countries, cultures, and people. Therefore, though many people use gestures instead of language, we need to pay attention to the fact that one gesture has different meanings in other countries, and there is a possibility that it may cause misunderstandings.

Presently, the importance of gesture has come to light by many research such as Birdwhistell's "Kinesics" or Schefflen's "The significance of posture in communication systems." There is one communication model. According to Mehrabian's research, only 7% of what we communicate consists of the literal content of the message. The use of one's voice, such as tone, intonation and volume, take up 38% and as much as 55% of communication consists of body language. By that means, something we tell

each other by conversation can be thought that non-verbal communication is bigger than verbal communication (Kobayashi, 686).

2.2 Types of Non-verbal Communication

According to Vargas, non-verbal communications are roughly divided into the following nine types: human body, body motion, eyes, para language, silence, body contact, interpersonal space, time, and color (16). When a person gives a message, we watch others to know whether that signal is certainly received and understood. Then, a response from others is returned by the form besides the word, such as a nod, eye movement, delicate change of facial expression on many occasions. Such non-verbal clues will regulate the flow of each other's communication (Vargas, 18). The message, in other words, signals for transmission becomes a sign or stimulation to the receiver, and it is heard or felt or seen. We can communicate with others by gesture, one's gaze, contact, smell, as well as voice and language (Vargas, 27). The sense of hearing is the most important to receive communication which uses spoken language. However, in non-verbal communication, all five senses of humans come to receive messages.

Although para language is not language by definition, it means loudness of the voice, tone and tempo, and it includes nods and laughs. Para language can transmit speaker's attitude to others such as affinity, hostility, superiority, or incertainty. In many cases, even if a speaker cannot be seen by us, we can discriminate speaker's feeling whether angry or pleasing from their voice factors besides the words. Features such as tone of voice, volume, stress, and accents convey human's feeling well (Vargas, 103).

Silence as a non-verbal communication means state of being soundless, however, some cases attend message to the sense other than hearing sense and others cases show a mute appeal alone. The state of being silently is one of the powerful communication tools beyond any doubt, but unless we grasp the situation in which silence happens, we will not be able to decipher the message of silence (Vargas, 108). Another type of silence is a pause. We speak with pauses between our own words and emphasize to filter message to other's heart. According to Vargas, comedians are expert at pausing their

words, and place this silent time in order to obtain a maximum laugh effect (109). When a person has a conversation face-to-face, people frequently do not become aware of this pause because that silent time is filled with other non-verbal message such as facial expressions gestures, and movements of the eyes. However, when people talk on the phone or listen to a recording tape, this pause is more noticeable than face-to-face conversation (Vargas, 110).

2.3 The Function of Non-verbal Communications

How do these various non-verbal elements of above act on situations of communication? The function roughly can be summarized into three types as follows (Kobayashi, 687). The first type is a sign that replaces a language. Regular gestures are sometimes used when it is hard to reach own voice because a person is far away or it cannot be expressed in words or it is necessary to give a signal stealthily. The ok sign which is making a circle by connecting the thumb and index finger is a typical example. Although there are cryptographic things and imitative things on these gestures, all of them have features that are used with the intent of communication and it can be clearly translated into words. Many gestures are peculiar to each culture, but it does not often become a factor which inhibits transmission even if such gestures are used in intercultural communication (Kobayashi, 687).

The second type is the construction of mutual relationships. It can be said that one of the important functions of non-verbal signs is that transmission of a part of a message which cannot be expressed with words. We adjust how to talk to others, our attitude, and behavior depending on a degree of intimacy or hierarchical relationship, and nonverbally, it appears typically such as manners, posture, how a interpersonal distance is, and kept the position of seating. People confirm their relationship to each other relying on such unobtrusive signs. When people genuinely communicate to a person who they have never met, they feel a general impression from that person's physique, looks, clothes, hairstyle, and makeup before the conversation starts. In addition, we appraise a person's personality by reading how they bow or shake hands, how they carry themselves, how they send a glance, and so on. A human's main part of their first impression is composed of such non-verbal

factors. That is why people pay attention to their clothes and hairstyles when their own first impression has a conclusive meaning like a formal marriage interview or job interview (Kobayashi, 688).

The third type is the adjustment of the flow of a conversation. Non-verbal factors also have effects that make the flow of communication smooth. Information exchange necessary for harmonious talk is largely due to nonverbal means such as signs for notifying speakers that put an end to the talk, signs which urge continuation of dialogue, signs which urge others to talk. Signals of utterance adjustment slightly differ by culture. For instance, when Japanese give others feedback that they are listening carefully, they use not only non-verbal signs but also chime in with “Ah” to their superior. On the other hand, the English and the Americans normally use non-verbal means such as their head, eyes or eyebrows moving. When people talk to someone who has a distinct culture, we sometimes feel that we cannot get across our message. Although we tend to think that this comes from a language barrier, it is also said that is because adjustment signs which were sent unconsciously to each other did not function well (Kobayashi, 690).

2.4 The Systematic Classification of Body Motions

Gesture, which is one type of the body motions, is the most important factor to come to a mutual understanding in our conversation because gesture has a visual transmission factor and it is easy to use (Kobayashi, 692). Its functions are systematically divided into four points as below.

The first is lexical gesture. Lexical gesture has clear meaning contents which translate into words as it is, and it is intentionally sent the same as words. The probability which is read as the lexical gesture, is comparatively high, and it is different from other non-verbal signs on that point. Meaning territories which work lexical gesture effectively is composed as following five commands or instructions: showing “Come here” by curling your index finger, manifestation of intention: showing “OK” by curling the index finger over the thumb, physical state display: showing “I am full” by rubbing their own stomach, feeling condition display: showing “Hurray” by raising your hands for joy, and courtesy movement: a handshake when meeting and parting

(Kobayashi, 692).

The second function is exemplary gesture. It does not have any independent meaning itself, but it exposes context or meaning of words by using it with words. Major kinds of them are emphasis movements and exemplary movements. As the former, a gesture which holding the finger up over the air as if drilling is an emphasis point when the speech or sermon is given as examples. The latter has a function which intensifies the meaning of words by a covering non-verbal gesture which has the same meaning as the message using words. When verbal and non-verbal unite, it becomes a message which can reach to other's hearts such as a gesture of bowing deeply while saying "I'm sorry" or consoling a disappointed person by giving a gentle tap on the shoulder while saying "It's okay". In most cases, words of apology, thanks, admiration, and consolation are not understood to be sincere unless they are corroborated with non-verbal factors. There is a descriptive gesture as another exemplary movement. It has a role to supplement visual information which lacks words to show a thing's shape, quantity, size, and height with one's hands while saying "This much", or "This big" (Kobayashi, 689).

The third function is feeling expression. As the comparison of "The eyes are more eloquent than the mouth," when human's inward emotions are told eloquently, they are mainly told non-verbally. A message of a feeling's impact which is sent from the whole body is quite stronger than only words. All human beings are born with a mechanism of feeling expression, and culturally learned method for controlling this mechanism in the process of growth, so it is considered that same feelings are not always induced to the same degree for the same stimulus. Ekman considered six kinds of a human's basic feelings which are physically expressed: surprise, fear, anger, disgust, happiness, and sadness. Although people inherently have a biological system which shows these feelings, there is a social restriction to express their natural form. It has been decided as a cultural promise whether we can show in what kind of situations, to what extent, and to what kind of person. It is said that there is a cultural difference in that promise, and as a matter of course, it act

on how to show their feeling, and forms a pattern of feeling expression in each culture. For example, a thing which can be said to be a type of behavior aesthetic is formed on the basis on that it has a tendency to put the cultural value in the modesty and the strength of union in traditional Japanese society. So, people come to learn to quite suppress emotions of joy, anger, grief, and pleasure in Japanese.

The fourth function is as secondary signs of expression. Secondary signs of expression are casual behavior which has a fixed meaning in the situation of communication such as “scratching one's head,” “touching the nape of the neck,” or “putting one's hands in one's pockets,” Morris states that these gestures are also called *adaptors* in English because it is thought to have been learned as adaptable behaviors for a specific situation in the process of the socialization (67). It is generally said that there is a habit which try to recover the stability to make a gesture which save appearances to regain their composure when primates are threatened in their psychological stability by something (Morris, 67). Behaviors of “playing with own hair,” “biting one’s own nails,” and “playing with one’s own hands,” are also included as adaptors. If there is a discrepancy between person’s language and gesture, for example, when a man says “I’m okay” while his knees trembling and his face is beaded with sweat, people cannot help believing the gestures more than the language message because people think that gesture is more difficult than language to gloss over. One other reason why gesture is more reliable than language is that although people consciously learned decipherment of verbal communication, people unconsciously acquire how to read non-verbal communication (Vargas, 21). That is why humans have become sensitized to the signals besides the word, and came to be able to read it by intuition (Kobayashi, 694).

5. Conclusion

Communication skills are very important for living in a society. This word reaches our ears many times. In the modern society in which the human relationships are becoming weak due to the expansion of the electronic media such as mobile phones, Internet and SNS, there are not a few people who have the perception that dealing with people is difficult. The entrance of

communications and human relations always begin with first impressions. The image which we feel from others at first, has a greater influence than we thought. Although we can communicate with people smoothly and build good human relations if others could be had a good impression for us, the possibility which misunderstandings may happen in conversation, increase if first impression is bad. Moreover, a first impression is very difficult to wipe away and hard to restrict the relationship once it is formed. According to Mehrabian's law, the rate of impression for person is that sight information which includes facial expressions, hairstyles and gestures, account for 55%, and hearing information such as speed of conversation or tone of voice is 38%, the rest of 7% is language information like a content of conversations. However, this law does not mean that contents of talk are transmitted only 7% and the appearance is important more than contents, it shows that people tend to regard the things which besides contents of talk such as looks or body languages, as important than what we say, just as a judgment factor of first impression. Taking this law into consideration, a large effect can be expected to make communication smooth by using body languages in intercultural exchanges which there is a language barrier. Non-verbal communication which contains gestures have some functions. For instance, there are functions as a sign that can replace into language like an ok sign, or transmitting of a part of a message which cannot be expressed with words, and adjusting of the flow of a conversation. So, it is possible to perform more smooth communication by using not only information transmission which uses spoken language but also non-verbal communication. Especially, in international exchange, gestures and behaviors play a large role as a supplementary means which overcomes the differences in language. But here, it should be noted that gestures are not common throughout the world. The meanings of gestures may translate into different things in different countries even if these gestures are the same motions.

A religious difference showed from gesture of "crossing one's finger" which was given in Chapter 2. Westerners cross themselves when they pray to God. Although "crossing one's finger" was made and simplified this act, it

used as a sign which begs forgiveness from God for telling a lie, and its history goes back to the age when Christians were persecuted by the Roman Empire. Japanese also do this gesture as an incantation which prevents uncleanliness. Shintoism has an original notion called *Kegare*, and Japanese tend to hate things which are associated with death or blood. They do *Engacho* to protect themselves from these *Kegare*, and it has existed from the Kamakura period. Also, it became clear that the difference of lifestyle such as tatamis and chairs or futons and beds, cause the change of building, and limit human movement from Japanese and Westerner's way of "squatting down" in Chapter 2. The "money sign" which is given in Chapter 3, shows the money's difference which are circulated bills or coins from ancient times. About money, Westerners are often talk openly and jokingly, but Japanese feel guilty for mentioning the topic of money, and talking about money is considered taboo in Japan. Moreover, there is a difference of how to feel stress between Japanese and Westerners from Chapter 3. It is said that Japanese society is structured vertically, and Western countries are a lateral society. Therefore, Westerners hesitate to admit that they feel stress in the open by communicating with others. On the other hand, there is a cultural climate in which they lament their own stiff shoulders to each other in front of everybody in Japan.

Gestures are one of the effective methods to convey one's own ideas and minds to others. However, meanings and motions of gestures are thought to change depending on each countries and cultures, and its differences sometimes show a country's cultures and national characters.

Works Cited

- "Children who can't squat down." TokyoWeb. 4 November 2015. Web. 8 December 2017.
- Du, Karen. "Can You Do the Asian Squat?" *BuzzFeed.com*. 1 October 2015. Web. 13 December 2017.
- Hamiru, Aqiu. *70 Japanese Gesture*. Tokyo: IBC Publishing, 2004. Print.
- Kobayashi, Yuko. *English Expression Dictionary of Gesture*. Tokyo:

- Kenkyusya, 2008. Print.
- Koike, Hiroko. *Intercultural Training*. Tokyo: Sansyusya, 1998. Print.
- Leger, Brosnahan. *Japanese and English Gesture: Contrastive Nonverbal Communication*. Tokyo: Taisyukansyoten, 1988. Print.
- Matsuo, Shingo. "Engacho" *45mix.net*. n.d. Web. 8 November 2017.
- Mehrabian, Albert. *Nonverbal Communication*. New Jersey: Transaction Publishers, 1972. Print.
- Morris, Desmond. *The Naked Ape*. London: Jonathan Cape Ltd, 1967. Print.
- Most Americans can't pull off the "Asian squat."* NowThis News. 28 March 2016. Video.
- Shiraishi, Daiji. *Japanese Idiom Dictionary*. Tokyo: Tokyodo Publishers, 1969. Print.
- Vargas, Marjorie. *Nonverbal Communication*. Tokyo: Shincyosya, 1987. Print.
- Yatabe, Hidemasa. *Japanese's How to Sit*. Tokyo: Syueisya, 2011. Print.

2017-18 Speech Contest Winning Speech

Kiarah Ballos, Freshman

Living in a Foreign Country

Four years ago, I was just a student living a normal life in our country, Philippines. I was studying in a school that I really wanted and I speak a language I am very familiar. It never crossed my mind that I will live in another country. Is it hard to start a new life in a foreign country? Does it take a lot of time to get use in a new environment? How can I make friends? These are some of the questions that have been running in my head since I came here.

A lot of people in my country thought that living in a foreign land, especially here in Japan is easy and enjoyable. In my experience, yes, it is enjoyable but also brought me a lot of hard times and gave me a new life. It was really challenging. It changes everything. When you live in a foreign country, everything will change including your daily routines. You must learn and accept their culture, follow their rules and, adjust your everyday life especially when you are with other people. There are many obstacles that you will encounter. One of those biggest obstacle is the language barrier. Let me tell you my experience. When I came here, I was so excited knowing that I could gain friends but my first day in school was so tough because I didn't know how to speak and write Japanese. 'Ohayou gozaimasu' was the only word I know. It was so challenging for me to learn Japanese language because I didn't have any ideas about it. I cried every night, thought of giving up but at the back of my mind there's a big 'NO! You cannot give up without fighting. So, I decided to study hard and embrace the hardship because I was thinking of my future and the opportunity to be here. I set aside my friends in the Philippines, my own culture and I put a lot of efforts in studying Japanese and focused on it. Someday somehow, I can go back from where I've been and tell my loved ones my great experience here in Japan. But for now, I have to focus more on my studies and strive hard to reach my goals for a better life.

Yes, it is hard to accept that living in another country basically changes you. Some parts of your personality, the way you think, and your

behavior will change. Also, living abroad has a lot of fears and challenges that will made you think that you want to give up and go back home. But on the other hand, it will give you knowledge on how to deal with people who has different personalities, opinions, cultures, and tradition. It will give you great experience and you will know how to value everything around you. You just need to strive hard because striving hard has always a good outcome.

2017 卒業生 卒業論文概要

赤平 萌奈 イギリスの怪奇趣味と怪奇文学

一般的にイギリス人は幽霊や妖精といった非現実的存在を信じている人が多いと言われている。特にイギリス人と幽霊という非現実的現象には大きな繋がりがある。この論文では、なぜイギリス人が非現実的事象や幽霊を信じやすいのか、現実世界での生活にはどのように関わっているのか、歴史的にはどのように関わっているのか、幽霊や超常現象が関わっているイギリス文学にはどのようなものがあるのか、それはどのような意味を持っているのかということを考察した。そして、この論文を通してイギリスの幽霊という存在の重要性は一体どのようなものなのかということを明らかにした。

第1章では、なぜイギリス人が幽霊という非科学的存在を信じやすいのかについて述べた。第2章ではイギリスでの日常における幽霊との関わりについて述べ、イギリス人にとっての幽霊は一体どのような存在なのかということを考えた。第3章では、幽霊や怪物などの非科学的現象が関わっているイギリスの文学について述べた。最後にイギリスのゴシック小説には一体どのようなものがあるのか、ゴシック小説の変容、ゴシック小説のメッセージ性について考察した。

一戸 清健 SNS がもたらす社会問題

この論文内では SNS（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）上で起きる問題を主なテーマとし、第一に SNS そのものについて、第二に SNS 上で起きている問題について、第三になぜ SNS 上でのトラブルが起きるのか、第四に SNS トラブルに会わないために、第五に結論、というふうに構成されている。アメリカ発祥の Web 上でサービスで

あり若者を中心に人気を博し、インターネット上の情報共有や、コミュニケーションに大きく貢献している SNS だが、必ずしもプラスの面だけではなく、インターネット上での問題も相次いで発生しており、この論文では「Twitter」、「Facebook」、「LINE」に注目して論じていく。Twitter ではアルバイトをしている学生が勤務中に悪ふざけをする様子をインターネット上に投稿し、それが拡散され、結果店の店主は廃業を余儀なくされるといった「バイトテロ」行為が問題視され、Facebook 上ではインターネット上での「いじめ」行為や、個人の投稿が原因となり、「個人情報や写真の流出」が発生、LINE においてはサービスの特性を悪用し、閉ざされた空間内で行われる「LINE いじめ」が発生し、社会問題となっている。これらの問題は SNS に投稿した際の周囲の反応を期待した「心理状況からくる行動」が重要なファクターであり、そこには「想像力とネットリテラシー」が欠如しており、SNS 利用への理解を今一度深めることが必要とされる。

瓜田 光佑 **Why American Movies are famous around the World**

Now Hollywood movies have big popularity for all over the world. I focused, how Hollywood could get big popularity. Especially I researched action movies and CG action movies. The people who could play an active part as an action actor tend to stay in people's heart. After that people want to see favorite actor on screen again, then if that actor plays new action movie, it movie will be famous. In this way, Hollywood is developing. When seeing a movie, we think there are people who remember a performer than the title is remembered. When we talk about movies for someone, then we must be talk from the name of actor at first. In this way, many actors were remembered by people.

Hollywood have experienced hard thing for hundred years, so they know how to make good movie and how to get the popularity for all over the world.

From start age to golden age and nowadays. Hollywood is growing in a movie kingdom certainly. The budget used for one movie, it does not act like undue importance. By the favor, Hollywood could spend money for SFX and CGI, then an excellent movie of a picture will be done. So, Hollywood movies are famous around the world.

小笠原 崇圭 **The Advantage of Japanese Casinos**

Japan has a great power in gambling, thus most Japanese people do not stop gambling nevertheless they understand gambling obtains harmful damage. According to Takekoshi and Komatsu, casinos in Macao becomes first place in the markets above Las Vegas and pay out 2.6 trillion yen in a year. However Japanese pachinko markets pays out 19 trillion yen in a year. Okawa and Saeki showed, Human has a history depending on gambles in their lives because of the development of human intelligence. From the numbers of scale of casino markets all over the world had increased or had been crawling sideways until 2007 in spite of a worldwide depression in 2007 and economic downturn precipitated by the Lehman Brothers bankruptcy in 2008 influenced to decrease the casino markets. Asian casino markets grow is the rising of people's income. Therefore, for some years Asian casino markets will expand to more large area. Japanese casinos may help the Japanese economy and produce a new tax income source for the Japanese government. Government can use that money from casino into welfare or parenting support that is now an issue. Then, Japanese casino has some negative points, however Japanese casino expect a profit that exceeds minus points. Asian market grows and Singapore in Asia also able to succeed. The Japanese casino plan is worth challenging smoothly lubricate the Japanese economy.

角田 萌 Harry Potter's Hidden Messages

『ハリー・ポッター』シリーズは「イギリス的」だと言える。なぜなら、イギリスならではの寄宿制学校が舞台であるからだ。そして、常識を重んじるわりには魔法のような「非常識」が知られる。Chapter Iでは、『ハリー・ポッター』シリーズにみられる階級についてとりあげた。この作品には魔法使いとマグル(非魔法使い)が存在しているが、相互の関係は非常に希薄であり、無関心とも言える。Chapter IIでは、階級とパブリックスクールの関連性について調査した。Chapter IIIでは、『ハリー・ポッター』シリーズのキャラクターの背景にある作者の意図について調査した。ローリングは彼女自身の経験や思いをこの物語に入れ込んでいることがわかった。階級社会や、階級社会に密接に結びついてきた英国の教育システムとその変遷を『ハリー・ポッター』シリーズに見てきた。このシリーズは大人たちまで虜にした。政治的、社会的変動がめまぐるしいスピードで展開する現代に生きる大人にとって、『ハリー・ポッター』の世界は安らぎのひとつとなり、全世界で何億という読者を魅了しつづけている。

菅野 汐里 ろう児の文字習得について

ろう児は、音声言語獲得前の失聴によって、周りにある音声言語を自然に習得できないため、主に視覚から情報を得る。ろう者と聴者のコミュニケーションでは、文字が大きな役割を果たしており、ろう者の文字習得が重要であると考えた。そこで、本論文では、子どもの文字習得に関する論文を検証して、聴児とろう児の文字習得過程を比較し、それぞれの問題点を見出した。第1章では、子どもの第一言語習得過程と日米のろう教育について述べた。第2章では、ろう者の社会生活と文字の関わりについて述べた。第3章では、子どもの文字習得過程、ろう学校における英語教育についてまとめた。第4章では、ろ

う教育と文字習得の問題点を考察した。その結果、以下のことが明らかになった。まず、アメリカのろう学校ではバイリンガル教育が主流になっており、効果が見られているが、日本では、手話をほとんど使用しない聴覚口話教育を行う学校が多く、手話を獲得しないまま音言語を獲得させようとする傾向にあるため、ろう児の教育環境を見直すことが必要である。また、聴児の文字習得には活字を読み文字への関心を持たせること、幼児期のろう児には文字の存在を伝えることが重要である。

工藤 千季 『ネバーバーランド』と『ピーター・パン』

—ジェームズ・M・バリの心象—

『ネバーランド』はジェームズ・M・バリが『ピーターパン』の物語を作り上げるまでの実話をもとに作られた映画だ。主演はジョニー・デップで第77回アカデミー賞の作品賞、主演男優賞(ジョニー・デップ)を筆頭に脚色賞、編集賞、美術賞、衣裳デザイン賞、作曲賞と計7部門ノミネートされた秀作だ。今回はこの作品やピーターパンから読み取れる19世紀初頭のイギリスの時代背景や、ジェームズ・M・バリの心象を探っていった。彼は夫を病で亡くした家族と出会い、その子供たちと遊んでいるうちに『ピーター・パン』の着想を得る。ジェームズはリアリストで悲観的な一人の子供に想像・空想で遊ぶことを教える。『ピーター・パン』はこの一人の少年のために書かれた物語だ。この物語でジェームズが伝えたかった事は「勇気」だ。彼は生涯を通じて「勇気」という言葉を大事にしており、勇気についてのスピーチをしているほどである。『ネバーバーランド』と『ピーター・パン』にもよく表れており、のり越えるべき試練が訪れ勇気を出して立ち向かうシーンがある。ここでの立ち向かうというのは、心象的な心の葛藤のことである。「勇気」ということを念頭においてこれらの

作品を観てみると何も考えずに観るのと違った楽しみ方ができるのではないかと思う。ジェームズ・M・バリは「勇気」をもってしてイギリス上流・中流階級の固定概念を打ち壊し、「勇気」を教えてくれた偉人である。

後藤 愛稀帆 カリフォルニア州の産休制度

The United States is the only country in developed countries that does not have paid maternity leave system. Despite the lack of great support, the birth rate in the U.S. is high. With the increasing number of married couple who both work due to the higher levels of academic achievement by women, it became possible to request a substantial system. In 1993, the United States government established Family Medical Leave Act (FMLA) to balance job and housework. However, it is not applicable to all laborer. The maternity leave system with specific contents was entrusted to each state. California state particularly worked aggressively, there enacted the first paid maternity leave system in the United State. California's Paid Family Leave (PFL) system also apply laborer who work at small companies, and guarantees salaries during maternity leave. So PFL system has allowed more workers to receive system. The idea that "women protect home and men work outsides" is still rooted in America. However, women also have come to work, therefore men should also participate in child care. In California, male maternity leave acquisition rate is rising, so I suppose that a substantial system affects male participation in child-care. In the United States where family forms are diversified, flexible maternity support is necessary from now on.

後藤 亜実 **Wuthering Heights and Emily's Message**

この論文では『嵐が丘』から読み取れる 18 世紀イギリスの時代背景

に着目し、著者エミリー・ブロンテが差別意識に関心を抱いたきっかけと、彼女が考える愛の成就とは何かを見つけることに主眼を置いた。チャプター1では、ブロンテ一家について述べた。特に父パトリックの人物像に焦点を当てると、『嵐が丘』におけるヒースクリフの創造は、アイルランドの貧しい農家に生まれ、苦労を重ねた父パトリックの経験から来ていることが分かった。チャプター2では、『嵐が丘』に描写されている階級社会への反発はどこから来たのか、そのきっかけを探った。また、当時は女性の執筆活動に対して否定的な意見が多かったことや、女性の結婚への固定観念など、女性に対する偏見が根強く存在していた。その点に関してもエミリーがどう考えていたのかを追求した。チャプター3では、『嵐が丘』と同世紀の文壇を、その作品の特徴と共に紹介している。いずれの作品においてもイギリスの階級社会がテーマとしてあり社会に対する反発が描かれていた。チャプター4では、チャプター3で紹介した作家と『嵐が丘』における愛情表現の仕方を比較し、それぞれの作者のメッセージ性を考えた。この『嵐が丘』の背景をたどることで明らかになったことは、『嵐が丘』はただの恋愛小説ではなく、エミリーは、彼女の処女作であり唯一の長編小説である本作を通して、社会に対する本音と疑問をぶつけたということだ。

笹花 哲平 **What is American Humor? Comparison between American Comedy and Japanese Comedy**

This paper tries to show what is American humor (comedy) comparing with Japanese humor. Apparently, it seems not to be an academic theme, however the featuring comedy of media and the development of comedy are dramatic and worth researching. Today, a lot of kinds of comedy are featured in media. Its style has changed since the old history and keeps diversifying. This means “comedy” is no longer just “Owarai”. It cannot be to

define it with simple words. Then, how should we regard comedy? To find the answer is not easy, because comedy connects to humans' emotion, laughter and the degree of laughter is different among each country. So, the style of comedy is also different among countries and as the result, it is almost impossible to find an answer "this is comedy" which can be common around the world. However, it will be possible to find some common points and differences of comedy in each world. It will lead to "comedy may be this". This paper shows American comedy and Japanese comedy which especially have more a developed culture through my review as a first step of finding such an answer. Nowadays, comedy is a subculture which is more especially developing and becoming popular around the world than any other subculture. I hope you to not only think comedy just "funny" but view it with a new "interesting" sight through this paper.

佐藤 香緩 **The Power of the Words of the Gettysburg Address**

In this thesis, describing about the power of the words of the Gettysburg Address by Abraham Lincoln. Lincoln made a speech the Gettysburg Address in Gettysburg National Ceremony in November 19, 1863. The Gettysburg Address has only 272 words and 1440 letters so it is known as the shortest address in history. The phrase of "government of the people, by the people, for the people" in the address had a huge impact to the American people. Moreover, Lincoln prevented the division of America and liberated the slaves. Thus, he accomplished great achievements so he is the most beloved president of the American people. For expressing greatness of the Gettysburg Address, the thesis describing about analysis of the words of the Gettysburg Address and comparing the Address of Obama and Kennedy.

白戸 万美子 **Children's Literature in Britain**

この論文では、教訓性がないとされている『不思議の国のアリス』と、『クマのプーさん』を取り上げた。このようなナンセンス文学は子どもにどのような影響を与えてきたか、そして、児童文学としてどのような役割を担っているのかを追及した。Chapter1では、イギリス児童文学の始まりについて時代背景とともに考察した。子どものための文学は、教訓的で教育効果のあるものから、幻想的で娯楽効果のあるものへと大きく変化した。Chapter2では、『クマのプーさん』の言葉遊びなどに着目しながら、ナンセンスにおける「無」について熟考した。Chapter3では、『不思議の国のアリス』が教訓的でないことに注目しながら、ファンタジー文学の役割について考えた。教訓性を完全に脱したということで、子どもたちは、自由な想像力を繰り広げることができるようになった。この論文で取り上げた二つの児童文学作品はナンセンスの世界を描いている。ナンセンス文学と比べて、教訓的な文学は子どものために様々なことを教えてくれるだろう。しかし、無意味であるということはその分、発想力や想像力でいくらでも世界を広げることができる。ナンセンスな児童文学は自分自身を成長させるために、子どもにとっても大人にとっても大切な力を培ってくれる。

神 遥華 **The Differences of Wedding Styles between America and Japan**

Japanese wedding means Shinto style wedding and American wedding means Christian style wedding. I discussed about three points. First, this paper discussed the history of Japanese wedding. Second, it discussed the dresses of Japanese wedding and American wedding. Third, the paper discussed the order of ceremony of Japanese wedding and American wedding. Historically, Japanese people think marriage means to extent relation between families. Japanese wedding has short history of wedding

ceremony. Therefore, many Japanese women affected American beautiful wedding style. Most people think Shinto style wedding is the traditional wedding style in Japan. Japanese having a wedding this style from long ago. However, originally in Japan, there were not special ceremonies like weddings until 1900s. Christianity made an opportunity for Japan to begin holding weddings. Weddings keep changing affected by the time. It is interesting to see beautiful and happiness newlyweds.

鈴木 愛寿翔 ベーグル——ユダヤから世界へ——

The character of bagels is a doughnut-shape roll, chewy like rice cake. Many people know that bagels are American food. Why do they think so? There are some reasons. In this thesis, why bagels are eaten by many people all over the world was discussed, thought it was Jewish local food. At present, bagels have a lot of varieties, for instance, onion, sesame, cheese, and so on. Bagels were made in America, and later they were changed to be more popular, as the production technology improved. In Chapter 1, the history of Jewish food and the origin of bagels were considered. Jewish food is connected with Judaism, therefore they decided between what they can eat and what they should not eat. In addition, there are three theories of the origins of bagels. First, there are of Vienna origin. Second, there are of Poland origin. Finally, there are of Prussian origin, but none of the theories have sure evidence. In Chapter 2, how bagels spread in America was discussed. Many Jewish emigrated from Poland to America, because they were persecuted. Almost all of them lived in Lower East Side in New York. Bagels came to America with people Poland. Many Americans accepted bagels. As the production technology improved, many people bought frozen bagels. In Chapter 3, the reason how bagels spread from America to the world was treated. Moreover, the way to eat bagels in the world was shown, for

example, Montreal, London, Israel and Beijing. One reason why bagels are eaten by many people in the world is that bagels are healthy.

鈴木 絢子 **How Starbucks has Changed American People and Society**

Starbucks Corporation all started with a cup of Howard Shultz's coffee. Starbucks was a small local store in Seattle and just a few staffs were operating the company. When Shultz walked into the company, he fell in love with a cup of Sumatra coffee right away after his first sip. Just one sipping of his coffee made him want to be part of the company. In the 1960s, coffee was not a popular drink among Americans and most people drank instant coffee, not bean coffee. Also, American people used to pay just \$1 to get a cup of coffee. But today, it is normal for people to pay \$5 for cup of coffee. A dollar in 1950 gave people the same spending power as \$5 today. During the Reagan boom of the 1980s, rich people used to show off their status through buying expensive and bigger commodities. In a case like that, American people, especially middle- class and poor people were captured by Starbucks instantly. Buying a Starbucks' European taste real coffee had the same impact. People buy things to say something about themselves. People could identify themselves from normal people and could get their new individuality through buying Starbucks' drink. The most notable success is that they could get all of this for the price of just a cup of coffee. Starbucks taught American middle-class people new definition of consumption. Starbucks also offered an unlimited place which is called the third place between work, school and home to do something and to communicate with someone in American's daily lives. Starbucks familiarity made people feel better, and people willing to pay for that comfort. Many of Starbucks' drinks contain a lot of caffeine and sugar and they are not good for both adults' and kids' health. If people take more caffeine and sugar than daily needs every day, they may increase

their risk of disease. If people got something bad happened to their bodies, they have to know it is a big sign to cut down the amount of caffeine and sugar. Small changes such as doing some exercises can improve their life for the better.

清野 史也 海外留学がもたらす影響

先行研究を通して、海外留学が英語能力に与える影響について調査するとともに、長期海外留学と短期海外留学を比較し、どちらが有用であるかを調査する。第1章の1節では短期海外留学に関する先行研究、2節では長期海外留学に関する先行研究をまとめその2つを比較する。また第2章では、海外留学がもたらす効果に対する要因について記述し、留学が与える影響の個人差について述べる。短期海外留学は、英語能力のうちリーディング、リスニング、ライティング(Fluency)を向上させることがわかった。しかし、短期間では英語能力が高い学生の英語能力は向上しなかった。長期海外留学ではリーディング、リスニング、ライティング(語彙・文法)が向上し、英語能力が高い学生も含めて向上した。またホームシックと英語能力に関する研究からホームシックを早い段階で克服し英語学習に集中することで英語能力が伸びることがわかった。先行研究から以上のことがわかり、長期海外留学では英語能力が高い学生の英語能力も向上する点から長期海外留学の方が有用であると結論づけた。

高橋 明歩 アメリカのカジュアルファッション

～アメリカ式ジーンズ～

今や1人1本以上は持っているであろう世界中で人気のアメリカ式

ジーンズは労働着として誕生した。しかしながら現在、労働のためだけでなく普段着、おしゃれ着として世界中で着用されている。種類もストレートジーンズやワイドジーンズ、スキニージーンズなど様々である。また、ジーンズだけでなくデニム生地を使ったジャケットやスカート、かばんなど様々な形のファッションアイテムが存在している。この論文では、アメリカ式ジーンズ誕生の背景やファッションとして取り入れられるようになったきっかけを探り、なぜ現在でもジーンズが日常着として長く世界中で愛されているのかを解明する。第1章ではアメリカ式ジーンズの誕生に大きく関わったリーバイ・ストラウスという人物やその背景を、第2章では当時の時代背景をもとにジーンズが労働着から日常着として着用されるようになった過程を、第3章ではジーンズとアメリカ式ジーンズの生みの親であるリーバイ・ストラウス社の現在について述べる。そして、第4章では第3章までの内容をもとに、ジーンズの人気の理由について考えていく。

田口 将太 ハリー・ポッターから学ぶイギリスの伝統的歴史と

パロディー

ハリー・ポッターは世界的に有名なイギリス文学作品である。物語に出てくる人物や出来事はイギリスの文化、歴史、伝統、伝説などを基にしている。本稿では、それらとハリー・ポッターシリーズを比較し、どのようにパロディー化されているのかを述べている。第1章ではハリー・ポッターから読み取ることができるイギリスの階級制度について述べ、貴族と庶民の対立や同じ階級同士の争いや下克上、違う階級同士の階級闘争をみることができる。第2章ではハリー・ポッターの物語に隠されている言葉遊びに対する作者のメッセージ性や意図を述べ、ドラッグや戦争についてのメッセージを受け取ることができる。また、登場人物の名前にアナグラムを使うことで、ユニークであ

り重要な人物として描かれていることがわかる。第3章では作中の生物は作者のこういった意図で登場しているのかを述べ、「死」をもたらす存在として登場するネズミ、お金との結びつきがある一方で邪悪との結びつきもあるヘビ、金銀の番人であるゴブリン、斬首刑が上手くいかなかったイギリス貴族のゴースト、奴隷問題を示唆する屋敷しもべ妖精、それぞれのキャラクターにイギリスとの結びつきがあることがわかる。ハリー・ポッターにはイギリスのこれまでが詰め込まれており、児童文学としても歴史の本としてもこれからも愛される作品になるだろう。

長尾 侑里 日本人英語学習者のスピーキング能力について

最近英語教育が急速化し、増々コミュニケーションを重視した授業が行われるため、教師はスピーキング指導について考えなくてはならない。英語の指導法にシャドーイングがある。門田は、シャドーイングは、リスニングとスピーキングに効果があると述べている。シャドーイングに関するリスニングの論文は多いが、スピーキングの論文はリスニングに比べると少ない。そこで、この論文では、シャドーイングがスピーキングに役に立つのかを検証し、また、シャドーイングを用いたスピーキングの指導方法を考察した。第一章では、シャドーイングがスピーキングに効果があるという理論づけを紹介し、その理論づけが確かなのかを調べるために、他の研究者が行った実験を比較した。第二章では、シャドーイングの指導方法に似ているリピーティングと音読を挙げて、これらの指導方法よりもシャドーイングがスピーキングに効果があるのかを検証した。第三章では、現在行われているスピーキング指導を紹介した後、前章で述べたことを踏まえてシャドーイングを用いたスピーキングの指導方法を考察した。結論として、シャドーイングと他の指導方法を組み合わせた方がスピーキングに役

に立つことと、シャドーイングは音読より効果があるがリピーティングよりはスピーキングに効果はなかった。

中舘 数馬 「アジア系アメリカ人の抱える問題」

この研究課題では題名通りにアジア系アメリカ人の人々にフォーカスを当てて彼らが移民をしてきたその当時から抱え、悩んでいる問題について各資料からの参考をもとに考察をしていく論文である。構成は序章から第2章、第3章、結論の四部構成となっている。それでは第2章「アジア系アメリカ人とは」からその概要に触れていくとする。第2章では、アメリカ社会において世界的に一般認知されている人種差別といえば白人と黒人の間で起こる差別がもっと浮き彫りにされて時折、日本国内でもニュースとなって取り上げられている。そこで第2章では彼らの陰に隠れがちなアジア系アメリカ人とはいったいどういった人種であるのかを近年における増加傾向の実態を交えつつ、さらに細かく分類すると意外にもその種類が多いアジア系アメリカ人の中から人口が多い順に6種類のアジア系アメリカ人の特徴を紹介しながら説明をしていくという風に、第2章の中身は彼らの特徴について言及する内容となっている。続いて第3章「アジア系アメリカ人の抱える問題」について。第2章でアジア系アメリカ人の特徴についてあらかた説明をしたところで、第3章ではいよいよ今回の研究課題の本題に入っていく。第3章では主に「モデルマイノリティ」と呼ばれる「アジア系アメリカ人には優秀な人物しかいない」というアメリカ社会が彼らに向ける偏見について述べる内容となっている。実際に学歴や所得の差をグラフに表して比較してみることで白人と黒人たちとの差を視覚化している。第3章はそうした結論からアジア系アメリカ人の中では、多くのアジア系アメリカ人がアメリカ社会で成功している傍ら、多くのアジア系アメリカ人が学歴や所得が低い人々もいると

いう声が上がリ、かつそうした偏見からプレッシャーを抱えて苦しむ人々もいるということについて言及しながら論じる内容となっている。以上が本研究課題である「アジア系アメリカ人の抱える問題」の大きな概要となっている。

中野 英弥 イギリス自動車産業の盛衰

イギリス自動車産業は現代になるにつれ衰退していった。イギリス自動車産業は19世紀初頭から作られ始めた蒸気自動車を起源として、様々な変遷を経て現代まで続いてきた。こうしたイギリス自動車産業を見ていくことは、近代イギリスから始まって現代まで続くイギリスの歴史の陰には自動車産業が付かず離れず傍にあったことを明らかにし、その重要性を再確認することになるだろう。第1章では、イギリスに蒸気自動車が現れた時からどのように自動車産業が始まっていったかを見ていった。イギリスでは自動車が公道を走るのを制限する赤旗法が制定され、加えてアメリカのフォードが大量生産システムを確立したことによる生産技術の相対的な遅れ、そして企業間の連携も出来てなかったことも発展の遅れに繋がった。第2章では戦後から現代までのイギリス自動車産業の発展と衰退を見ていった。戦後復興のための輸出産業とされたイギリス自動車産業は合併を繰り返し国営化されたが、立ち直ることはなく民営化され、そのほとんどが海外企業の傘下に収まることとなり、衰退していった。第3章ではその衰退の経緯と原因について探った。このようにイギリスの自動車産業はイギリスの歴史と密接な関係にあり、イギリスの政治や労使関係等の要因に振り回された挙句に衰退していくが、その経緯を追うことでイギリスの歴史を違った観点から眺めることが出来るだろう。

奈良 章史 **Japanese and Foreigner's National Character and Cultural Differences as Seen from the Differences of Gesture**

Communication skills are very important for us when we live in modern society. This word reaches our ears many times, and it is necessary for building a better relationship of confidence with people and knowing each other well. Communication between persons is mainly established by exchanging spoken or written language. However, it is generally said that gestures and body language are another way of communication, and people often express their emotions without using language in their daily life. Non-verbal communication which contains gestures have some functions such as a sign that can replace into language like an ok sign, or transmitting of a part of a message which cannot be expressed with words, and adjusting of the flow of a conversation. So, it is possible to perform more smooth communication by using not only information transmission which uses spoken language but also non-verbal communication. Especially, in international exchange, gestures and behaviors play a large role as a supplementary means which overcomes the differences in language. However, it should be noted that gestures are not common throughout the world. The meanings of gestures may translate into different things in different countries even if these gestures are the same motions. For instance, restriction of body movement caused by difference of lifestyle, or religious incantation which remains deeply rooted, and how to feel stress in vertical society and lateral society and so on, these natural character and cultural differences become clear by interpreting differences of Japanese and Westerner's gesture.

原田 葵 **Japan and American Elementary School Life**

I summarized the school culture of the America and Japan. In addition, the cultural differences between America and Japan are discussed. The reason why there are many differences in the school culture of the America and Japan, it is possible to know the school culture of Japan when examining it. Furthermore, the school life of the elementary school was observed, and the Japan thought whether there was something which had to be influenced from America. First, Japan and American school life. It was a reference to the actual educational scene of California and how to spend the day of the children. Moreover, how to spend time after school. The children's homework was given as an example. When I compare the America and Japan, it is thought that there was a difference of the system. Therefore, there was a difference of a fundamental idea, and there seemed to be a completely different culture. There is a difference in culture, but neither is the school for children. The school life is protected by the support from parents, the teacher, and the people around them.

古里 祐佳 **Thinking about Social, Health and Life of Vegetarians**

I researched vegetarians. Vegetarians have various backgrounds. It is ethical reason like protect animals and environment, preference for health, preference for safe foods, religious reason and the view of lifestyle. It is complicated. In addition, general image of vegetarians changed by influence of getting higher intent to health, spread of food and nutrition education, media and so on. Vegetarians are known by many people than before. Through this thesis, I did not understand about vegetarians deeply. I do not just like meat, so I do not eat meat. However, vegetarians are not. They love animals, protect environment and ethic, and think about safe of foods and health. They become vegetarians by these important things. Moreover, I

thought that vegetarians are not health before writing this thesis. However, incidence of cancer and death rate get low by become vegetarians compare to non-vegetarians. Therefore, I again realized vegetarians this time. I want to keep being vegetarians from now on.

三浦 恵美 アーサー王伝説を通して見るイギリス

この論文ではアーサー王伝説を通して、イギリスの成り立ちや、人物的特徴について説明してきた。イギリスの歴史を説明する時に、アングロサクソン人の侵略に対抗したケルト人の話は繋がりが深いと言える。第1章では、ケルト人について説明した。ケルト人を指揮し、先導してきた人がアーサー王の元となっている説は多く、特に、ケルト系の血を引いているスコットランド、ウェールズ地方の人々にはアーサー王伝説は根強く語られている。第2章では、アーサー王伝説に登場する円卓の騎士について説明した。現代のイギリス人の特徴を述べる際の一つの例として、英国紳士と言われる背景を円卓の騎士や騎士道精神と絡めて説明することができるだろう。円卓の騎士たちの中でも、アーサー王の甥であるサー・ガウェインは女性に対して礼儀正しく、王に対しても忠誠心があったのが伝説や物語からも見て取れる。第3章はファンタジー作品から見るアーサー王伝説について説明した。イギリスの作品の中でもファンタジー作品は特に人気がある。アーサー王伝説の中にも、聖杯探索や魔術師マーリンの存在はファンタジー的要素の一つであると言える。J・R・R トールキンによって書かれた指輪物語は、指輪を棄てるための冒険、魔術師ガンダルフ、不死の国はアーサー王伝説の影響を受けた点と言える。

水木 奈美子 **Jane Austen: A life Shadowed by her Pride**

This paper has described the British culture in the 18th century and Jane Austen's lifestyle using a book of *Pride and Prejudice*. Jane Austen's books have been read by many people still now even though her novels were written in the 18th century. The reason why I wrote about Jane Austen is that I am an enthusiastic fan of Jane Austen. Chapter I has considered Jane Austen's lifestyle. In this century, it was not easy to openly express one's own opinion, especially for women. Therefore, Jane Austen hid the fact of writing a book. Nevertheless, she kept writing her opinions into her novels. Chapter II has described the types of marriage using *Pride and Prejudice*'s characters. Chapter III has discussed the class system in Britain and Jane Austen family's class. British people in the 18th century did not meet between the high-class people and low-class people. The reason why Jane Austen never got married with anyone is that Jane's family's class was higher in the middle class. As these facts show, Jane Austen followed her own intention in her life as well as her romance. The words that Jane Austen wanted to tell everyone did not reach everyone while she was alive. However, Jane Austen's intention has been passed down to the readers of Jane Austen. The ultimate purpose of this paper lies in my wish that as many as people know the charms of her novels and continue to love them.

溝江 大地 **Rock Music in America and Japan**

Rock music is one of the most famous and popular music genres in the world, the first history of rock music was in the 1940s, and rock music includes elements of several black and white American music styles: black guitar-accompanied blues; black rhythm and blues, noted for saxophone solos; black and white gospel music; white country and western music; and the songs of white popular crooners and harmony groups. The first

appearance of rock music in Japan is in American military base around 1950s to 1960s because of improving of radio. Rock gave the influences not only to musicality, but also people's lifestyles. In the moment of early rock 'n' roll, Elvis Presley became an icon of both music and film, Elvis thrust his way into the public conscious and left behind quite the number of memorable looks. After that, the Beatles became famous, and their hairstyle was popular and became their trademark. The styles of punk rock also affected people's lifestyles especially in young generations soon with the intensely musicality and live performances and music videos. Young people defined themselves as an anti-fashion urban youth street culture and imitate punk rock stars' fashion, and that defined wearing jeans (sometimes it is torn), torn T-shirts or black T-shirts, black leather jacket (sometimes attached silver decorations), became one of mainstream culture. A fashion style that has been affected by rock musicians' styles was appeared in the 1980s in Japan, that called "visual kei fashion". The first appearance of that is a band 'X Japan'. the reason why the style became famous was the style expressed not only musicality, but also the aesthetic appearance using property, wearing glitzy clothes, and making up. Even today the style is more popular all over the world and kinds of that is increasing. In this way, rock music is not only a music genre, has deep histories, gives many influences on people; fashion styles, and hair styles, in other words, it is even a part of culture in the world.

森内 きらら 日本人英語学習者の冠詞習得について

—英語名詞句の認識の観点から—

日本人英語学習者が英語の冠詞を適切に使用することは容易ではない。中井(2007)は自身で行った冠詞習得についての調査の結果、学習者の英語名詞句の認識が冠詞習得を困難にしている要因の一つであると示唆している。その名詞について見てみると、学校文法で解説されてい

る名詞の分類では説明できない用法が多くあることがわかる。さらに、学校文法以外の名詞の分類について詳しく見ていくと、それが非常に複雑であるということに気づく。例えば、不定冠詞 **a/an** は可算名詞の前に置かれるが、まずこの名詞は可算名詞で、その名詞は不可算名詞というように固定して名詞の可算・不可算を認識している学習者が多い。しかし、ほとんどの名詞は可算・不可算の両方の形で用いることができるため、固定して捉えることは名詞に不定冠詞 **a/an** をつけるかつけないかの問題に直面したとき判断に困る。したがって、「名詞の認識が冠詞習得を困難にする要因の一つ」という中井の主張をもとに、上記でも述べた名詞の可算・不可算の問題や、物質名詞・抽象名詞が普通名詞用法になるケースなどを取り上げ、それぞれ研究者たちの解説を加えながら、冠詞との関連性の高い名詞がいかに複雑であるかを明らかにした。また、可算・不可算名詞を区別するのに有効な分類基準である「均質性・非均質性」の考えと照らし合わせながら、名詞の分類法上の抽象名詞と具象名詞の区別についての考察を行った。

楊 海翔 アメリカにおける絶滅した鳥類について

—主として羽毛と装飾の関係—

この卒業論文は、羽毛という特筆すべき特徴を持つ鳥類がアメリカ周辺の文化に与えた影響を、今は現物がほとんど残っていない絶滅種を中心に探っていくというものである。それにあたって、ハワイにおけるミツスイの例と、カロライナインコとコンゴウインコの例、そしてリョコウバトの例を言う大きく分けて三つの事例を章に分けて論じていく。共通点や性質の違う点を見ていき、歴史的に興味深い点を探していった。結果としては、章に分けた時点である程度分かっていたことだが、最初の章から後に進んでいくにつれて芸術思想的なものからより商業的になっていった。それは鳥の羽毛の派手さであるとか、

利用法や人に対する実害、個体数の多さなど様々な要因があるといえる。そして、すべてに共通していえるのが、これらの現象はアメリカ人の開拓精神が成し得た、この時期だけに見られる輝き、もとい暴走であったことである。普通は捉えづらい、空を飛ぶ目立つものを大量に捕らえられるのは人だけであろう。それゆえに、ファッションや地位の誇示、更に色に様々な意味を持たせてこれまで鳥類は利用されてきたのである。他の動物に比べ、人々の文化に与えた影響も独特だと言える。

若佐谷 直 **Various Sex: The Comparison between Japan and England**

この論文では、多様な性をテーマとしている。また、その中でも特に、同性愛についての歴史と現状そして未来に関してイギリスと日本を比較しながら考察する。第1章では、欧米と日本の同性愛に関する歴史について述べた。現代のように同性愛が受け入れられるようになるまでに、多くの同性愛者が奮闘した。その中でも、1969年にニューヨークで起きたストーンウォール事件は後に同性愛者たちの権利獲得運動の転換点ともなる歴史的な事件であった。また、イギリスでは19世紀に活躍した作家のオスカー・ワイルドが男色を咎められて収監された。一方、日本では江戸時代、男色という文化が存在していた。様々な国で、古くから同性愛の文化は世界中で存在していた。第2章では、セクシャルマイノリティと人権について述べた。日本でのセクシャルマイノリティの割合と現状から差別や偏見が生まれる理由や背景についてみていく。さらに、2015年に日本全国で初となる渋谷区の「同性パートナーシップ」を例に同性愛者の困難について述べた。第3章では、社会的支援について、基本的理念や快適な社会にするために私たちができることについて述べた。セクシャルマイノリティについて知

り、考えることは自分自身と向き合うことにもなる。普通の定義はどこにも存在しないのだ。

渡邊 由宇希 英語母語話者が捉える冠詞の意味

日本人英語学習者にとって英語の冠詞を正しく使い分けることが難しいのはなぜなのだろうか。その原因は大きく分けると二つあり、日本語には冠詞がない、冠詞そのものが難しいということが考えられる。この二つの要因のうち、後者の要因を動機として定冠詞の意味・機能に的を絞り、定冠詞の本義を追究した。本論文では定冠詞の本質的な意味が本当に唯一性(uniqueness)であるのかを特定の用法だけでなく、総称的用法の観点からも考察すべきであると考え、定冠詞の総称的用法においても Russell(1905)が提唱する唯一性が満たされているのかを考究した。第一章では、定冠詞と不定冠詞、無冠詞複数形の三つの総称的用法を比較し、意味の違いを探った。第二章では、白谷(2002)の提唱する「区別説」と前田(1993)の提唱する「プロトタイプ読みによる唯一性説」をそれぞれ考察した。第三章では、第二章で扱った「プロトタイプ読みによる唯一性説」をより深く考察し、その中で生じた疑問である対比の必要性について検討した。第三章の終わりには、織田(2002)が名付けた第二世代と第三世代の定冠詞について論じ、英語母語話者のカテゴリー的視点が定冠詞総称的用法において必要であるとまとめた。定冠詞の総称的用法の唯一性を捉えるには、「プロトタイプ読み」と「カテゴリー的視点」を組み合わせることが重要であり、それが英語母語話者の捉える総称の世界であるということが明らかとなった。

弘前学院大学英語英米文学会活動記録

- 英米文学会総会 2017年4月25日

- 新入生歓迎会 2017年5月23日
 英文学会の全員が参加し、盛大な歓迎会になりました。UW の研究生も参加し、みなさんは楽しんでいました。

- 第3回英語弁論大会 2017年7月20日
 発表課題：自由課題
 金賞： バリオス・キャラ (英語英米文学科1年)
 銀賞： 橋本 大祐 (英語英米文学科3年)
 銅賞： 佐藤 裕香 (看護学部2年)

- ハロウェーンパーティ 2017年10月31日

- 講演会 2017年11月21日
 講師：Malu Sciamarelli
 演題：How to Improve English Reading and Writing

- クリスマスのパーティ 2017年12月7日

- 卒業論文ポスター発表会 2018年2月1日

- 英語・英米文学科4年生の送別会 2018年2月1日

会員活動記録

佐藤 和博

講演

弘前の前川國男の建築作品について、ソウル神学大学、2017年10月24日、ソウル

佐々木 正晴

論文

“Gaze shift patterns during a jump with full turn in male gymnasts”, 共 (Yusuke Sato, Shuko Torii, and Thomas Heinen), 2017年2月、*Perceptual and Motor Skills*, 124(1), pp. 248-263.

「視野の変換／遮蔽事態における移動行動，その認知方略の形成」, 共 (鳥居修晃・佐藤佑介), 弘前学院大学紀要第53号、pp. 1-9.

口頭発表

Coordination of eye-head movements and the amount of twist of the body while jumping with turn, 2017年9月, European Conference on Visual Perception, Science Museum, Barcelona, Spain.

「先天盲-2人，事物認知の形成過程」, 2017年9月、日本特殊教育学会、国際会議場、名古屋

「視野変換3事態における移動方略とその形成過程」、2017年9月、日本心理学会、久留米シティプラザ、久留米

「先天性光覚盲児による事物の呼称活動」、2017年12月、日本基礎心理学会、立命館大学、大阪

川浪 亜弥子

書評

The Masters of the Revels and Elizabeth I's Court Theatre (by W. R. Streitberger, Oxford University Press)、2016年、*Shakespeare Studies*、第54号、日本シェイクスピア協会、pp. 19-22.

フォーサイス・エドワード

口頭発表

Student Perceptions of Required Smartphone Use in the English Classroom, 2017年11月、AsiaCALL 2017, The Open University of Ho Chi Minh City, Vietnam.

弘前学院大学英語・英米文学会会則

- 第1条 本会は、その名称を弘前学院大学英語英米文学会とする。本会の事務局は、弘前学院大学文学部事務室におく。
- 第2条 本会は、英米文学・英語学・欧米文化の研究、英語教育の促進、および会員相互の親睦を目的とする。
- 第3条 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 大会（年1回）。
 2. 機関誌を発行。
 3. その他、研究発表会、講演会の開催等必要と認められる事業。
- 第4条 会員は、次のいずれかに該当し、所定の会費を納めた者とする。
1. 弘前学院大学文学部英語・英米文学科所属の専任教員。
 2. 弘前学院短期大学英米文学卒業生ならびに弘前学院大学文学部英語・英米文学科学生および卒業生。
 3. 本会の趣旨に賛同する人。
- 第5条 本会に次の役員をおく。
1. 会長 1名
 2. 委員 若干名
 3. 会計 1名
 4. 監査 2名
- 第6条 役員を選出は次の方法による。
1. 会長は、弘前学院大学文学部英語・英米文学科所属の専任教員の互選による。
 2. 委員は、第4条1項および第2項の中から会長がこれを委嘱する。
 3. 会計は、第4条1項および第2項の中から会長がこれを委嘱する。
 4. 監査は、第4条1項および第2項の中から会長がこれを委嘱する。
- 第7条 役員任期は1年とし、再任をさまたげない。
- 第8条 本会に名誉会長をおくことができる。

第9条 本会は、会費、寄付金、補助金によって運営する。会費は年額2,000円とする。

第10条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第11条 会則の変更は、大会出席者の過半数の賛成をもって成立する。

付 則 この会則は1971年4月1日より施行する。

付 則 この会則は1986年7月4日より施行する。

付 則 この会則は2004年4月1日より施行する。

付 則 この会則は2017年4月25日より施行する。

弘前学院大学英語英米文学会留学生奨学金規定

- 第1条 本規定はウイスコンシン大学及びシェナンドア大学に留学する学会所属の学生に給付する奨学金について定めたものである。
- 第2条 給付を受ける者は年度内で1名以内とする。
- 第3条 給付額は5万円とする。
- 第4条 給付を受けようとする者は奨学金申請書を当該年度の6月1日までに、英語英米文学会会長に提出しなければならない。
- 第5条 選考方法等については次のとおりとする。
- 1 指定されたテーマの英文エッセイ（1,000語以上1,500語以内）を当該年度の7月1日までに提出しなければならない。
 - 2 提出先は英語英米文学会会長とする。
 - 3 選考者は英語英米文学会の教員とする。
 - 4 当該年度の英語英米文学会総会において留学生奨学金受賞者を発表する。
 - 5 留学生奨学金受賞者は留学しなかった場合、奨学金を返還しなければならない。
- 付 則 この規定は2004年4月1日より施行する。
- 付 則 この規定は2015年4月1日より施行する。
- 付 則 この規定は2017年4月1日より施行する。

エッセイのテーマなど留学生奨学金についての問い合わせは学科長まで。

2017 Topic: 希望者がいませんでした。

弘前学院大学英米文学 第42号

2018年3月17日

発行者 弘前学院大学英語・英米文学会

代表者 佐藤 和博

編集者 フォーサイス・エドワード

〒036-8577

青森県弘前市稔町13-1

Tel. 0172-34-5212

Fax. 0172-32-8768

印刷

The English Department Review of
Hirosaki Gakuin University

No. 42 March 2018

Contents

Yale's Reports of 1828 and Modern Sciences: Focusing on the Relationship between the Classical Curriculum of the Yale College and the Scientific School.....1	Yoshihiro Hara
Japanese and Foreigner's National Character and Cultural Differences as Seen from the Differences of Gesture (Abridged).....18	Akifumi Nara
2017 Hirosaki Gakuin University English Speech Contest Winning Speech Text.....28	Kiarah Ballos
Summaries of 2017 Graduation Theses30	
Hirosaki Gakuin University Department of English and English Literature Association Event Information.....54	
Research Activities of the Faculty of the Hirosaki Gakuin University Department of English and English Literature Association.....55	
Constitution of the Hirosaki Gakuin University Department of English and English Literature Association.....57	
Hirosaki Gakuin University Department of English and English Literature Assoc. Exchange Student Scholarship Guidelines.....59	

The Association of the Hirosaki Gakuin University
Department of English and English Literature